

「商人たちの湊町」

開催期間：平成25年9月7日～平成25年11月11日

■…解説パネル ○…主な展示品 ※…参考資料あり

町の様子

■酒田の発祥 一向酒田から当酒田へ

酒田の町は、古くは向酒田といい、袖の浦（宮野浦）のあたりに町があったという。藤原秀衡の妻（もしくは妹）で平泉より落ち延びてきたといわれる徳尼公（徳姫）と、その遺臣36人がこの地にやってきたことが酒田発祥の由来と伝えられている。

徳尼公亡き後、36人の遺臣は向酒田の地侍となって、船問屋を家業とし、自らを「長人」または「三十六人衆」と称して町政を担当したといわれている。室町時代ころにはすでに泉州堺や播州などと海船による物資の交流があったが、最上川の流路の変化とともに、袖の浦は船着場としての条件が悪くなった。そのため、船着場として便利の良い、最上川北岸つまり当酒田（現在の酒田）への移転が三十六人衆によって計画された。移転時期はよくわかっていないが、永正元年（1504）から約100年間にわたって行われたといわれている。

■当酒田の町割り

当酒田の町は、新井田川岸と最上川岸の地から発達したものであると考えられている。米屋町や片町には大名の蔵が、本町には廻船問屋の蔵が建てられており、このあたりが古くは最上川に面していた場所であるといわれている。

当酒田には1000軒ほど家があったが、慶長6年（1601）の最上勢による東禅寺城（後の亀ヶ崎城）攻めの際に、全市街が焼き尽くされた。その後は、最上義光の家臣で亀ヶ崎城の城主となった志村伊豆守光安によって新たな町割りが行われており、このときの整備によって、おおよそ現在の酒田の町並みになったといわれる。

○酒田町絵図 江戸時代 明暦2年（1656）／酒田市立光丘文庫蔵

この絵図は、明暦2年（1656）の大火による焼失範囲を記録したもので、酒田の最も古い町並み絵図であるが、このころには船場町がまだ存在していないことがわかる。

当時は船舶の停泊や荷物の積み下ろしの場所となっていた最上川や新井田川から近いと

ころに、本町通りが存在していた。三十六人衆を中心とした豪商たちは、この場所に軒を連ねて廻船問屋を営み、本町は酒田の町で一番賑やかな場所となった。

なお、このころにはまだ町の北側と西側の開拓が進んでおらず、砂地が広がっている。

▼明暦2年の町の戸数

酒田町組

町名	戸数(軒)
(本町) 壱ノ町	21
(本町) 二	20
(本町) 三	33
(本町) 四	20
(本町) 五	19.5
(本町) 六	17.5
(本町) 七	15
片肴町	26
上袋小路	30.5
稲荷小路	23
山椒小路	21
中袋小路	21
御宿小路	25
下袋小路	25.5
利右工門小路	20
横鍛冶町(十王堂町)	20
中町七丁	123
片平町	5
計	486

内町組

町名	戸数(軒)
内町	76
片町	73
あわぢ(淡路)小路	9
かしはた町(中の口河端)	16
肴町	16
本米屋町	24
浜町	14
計	228

米屋町組

町名	戸数(軒)
新米屋町	65
山王堂町	31
荒瀬町	18
浜町横丁(近江町)	18
鶴田口浜(天正寺町)	33
計	165

○改正増補酒田絵図(複製) 江戸時代/酒田市立光丘文庫蔵

江戸中期～後期の酒田の町絵図で、町組ごとの色分けがなされている。

内町組・米屋町組は古くは東禅寺もしくは亀ヶ崎城分と呼ばれ、本町を中心とした酒田町組とは堀と土手で仕切られて、城下町的色彩を持っていた。元和8年(1622)、酒井氏が入部すると土手は崩され、堀は埋められて町人の町へと加えられた。

このころの絵図になると船場町の名前も見られる。

■本町の町並み

本町は酒田の町の中心地であり、富裕な商人たちの店が軒を連ねていた。本町に店を構えることは最高のステータスであり、商人にとって「一生のうちに本町に店を構える」ことは強い憧れであった。しかしながら、華やかな町である一方で、盛衰の激しい場所でもあり、つぶれたり引っ越したりしていく者も多かったという。

三十六人衆は本町に屋敷を構え、廻船問屋を営んでいることが絶対条件であったが、貞享3年（1686）～明治元年（1868）の182年間の間に家を持ち続けたのは、36家中10家で、残りの26の家株をめぐって91家がこの期間の間に入れ替わった。さらには、時代が下ると36人満員が揃わず、欠員が出ている。このことからわかるように、酒田の中心地は非常に生存競争の激しい土地であった。

地図中の、名前の脇に「長人」と書いてある区域が、三十六人衆の一員の屋敷である。「町年寄」は三十六人衆の中心となって町政を担った者のことである。

湊町の商い

■商業の発展

三十六人衆は向酒田時代から船問屋を営んでいたといわれるが、室町時代から戦国時代にかけて、豪商たちは自らも船を持って交易を行っていたと伝えられる。

寛文12年（1672）に伊勢出身の商人・河村瑞賢によって西廻り航路が整備されると、酒田の町は飛躍的に発展した。当時の酒田への主な移入品は、播磨（兵庫）の塩、大坂や伊勢（三重）の木綿、津軽や秋田の材木、松前の干物などであった。最上川からは内陸の藩の年貢米、大豆などが入ってきたが、これらは酒田湊から登り荷として上方に運ばれた。

酒田の町の商人たちは、内陸の藩の年貢米などを保管する宿をしたり、集まった物資を売る問屋などの商いを営んだ。このころになると、海船を持つものは少なくなり、北前船や松前からの船を相手にして、仲買いや蔵敷料（商品の保管料）、売買の際の保証口銭（手数料）などを主な収入とする廻船問屋が大きな勢力を持った。

天和3年（1683）には毎月300隻以上の船の出入りがあったといい、このころの一年の入船平均は約2500～3000隻にも達して、酒田の湊は繁栄の絶頂を迎えた。

■問屋の活動

春になり、北前船が酒田に入湊する時期になると、廻船問屋の小僧たちは日和山へ登り、客船帳で覚えた取引先の帆印を見つけると、店の主人に来船を報告した。主人は羽織袴に酒樽などを携えて、船上で船頭と入船祝いを行ったという。

酒田の商売の中心となったのは、問屋仲間の活動であった。問屋は多くの資本と倉庫を持ち、他国の商人を宿泊させて、約1%の商品の蔵敷料（保管料）と、商取引の際に保証人

となって一定の額の売買口銭（手数料）を徴収していた。

大問屋は主に上方からの下り荷物を取り扱ったが、松前や最上川筋とも取引していた。本町のほか中町・秋田町・獺師町に大きな屋敷をかまえ、その裏地や新井田川岸に多くの土蔵を持っていた。大問屋のほとんどが三十六人衆であり、しだいに三十六人衆は廻船問屋の株仲間的性格を濃くしていった。

小問屋は諸国小船の荷物と最上川を下ってくる荷物を取り扱ったり、海船の船員や最上川や赤川を下ってくる船頭衆、飛島や吹浦などの近海からくる船頭たちの宿となったりした。

○御客帳 江戸時代 明和4年（1767）／酒田市立光丘文庫蔵

酒田の廻船問屋が、入湊してきた得意先の廻船を書きとめた記録。船印や帆印、船名、船主などの情報が記載されている。

加州（石川）、越中富山（富山）、越前（福井）、紀州（和歌山、三重）、宮崎、摂州（大阪、兵庫）など、様々な地域の商人の名前が記され、当時の交易の賑わいを伺い知ることができる。

■酒田にやってきた北前船

寛文12年（1672）、西廻り航路が整備されると、酒田には全国各地から廻船がやってきた。北前船には千石船など大型の船も多く、千石船は造船に千両かかり、一回の航海で千両儲けるとも言われた。

北前船での商売は、「のこぎり商い」とも呼ばれ、入湊した先で商品を仕入れ、それをまた別の湊で売るといった方法をとった。3～4月には北へ向かって出航し、11月頃に帰ってくるという航海が主であった。

何をどこから買うか、何をどこで売るかは基本的に船頭に任されており、船頭が問屋と交渉することもあれば、船宿が仲介を行うこともあったが、船頭は一代のうちに問屋を変えないという原則にもとづいて取引を続けた。

酒田でも本問家の10艘を筆頭に、尾関又兵衛などが船主として、松前から海産物を積み入れ、北陸や大阪、江戸に運んでいたという。

北前船の船頭たちは、湊に入るとすぐに日和山公園裏手の金刀比羅神社に参拝した。金刀比羅神社は航海の安全を願って文化8年（1811）に讃岐（香川県）の金毘羅宮より勧請された。また、大山の善宝寺も北前船の船頭たちの信仰を集めており、貝喰池の龍神信仰で全国に知られていたという。

○廻船手形 江戸時代 文政12年（1829）／鶴岡市郷土資料館蔵 ※1

鏡谷等町年寄3名と大庄屋2名から、津々浦々の番所に宛てた文書。酒田の柿崎屋金兵衛の手船である大徳丸の、乗組員5名はキリスト教ではないので、番所を通してほしいと

いう内容が記載されている。

○茶箱 江戸時代／あいおい工藤美術館蔵

京都宇治から茶の輸送に使われた箱。側面には「海上安全」「海上順風」の文字があり、荷物が無事に届くよう祈りが込められていたことがわかる。

蓋には「明治十八年 大坂帳面」とあり、この箱が渋紙を貼った丈夫な箱だったため、帳簿入れに転用されたと考えられる。

○船絵馬 江戸時代 嘉永2年(1849)

船主や船乗りが航海の安全祈願や無事に航海を終えたことに感謝を捧げるために神社に奉納したもの。

○皇大神社(写真)

金刀比羅神社と合わせて「神明さん」と呼ばれ、船乗りたちの信仰を集めた。

神社入口の参道である「神明坂」の階段には、北前船によって運ばれてきた越前(福井県)の笏谷石が使われている。

○金刀比羅神社(写真)

皇大神社の境内にあり、出雲石でつくられた珍しい跳躍姿の狛犬や、北前船で実際に使用した碇なども残されている。現在は社殿の修復中で、9月末に完成予定。

○常夜灯(写真)

文化10年(1813)正月、紀州日方浦の船頭・橋本源助、羽州加茂の永沢清吉、酒田の網干与佐衛門の3人が世話役となって、日和山の現・展望台のあたりに建立された。

この常夜灯は船舶入湊の際の標識となったが、酒田の商人のほか、下関、肥前(佐賀、長崎)、備後(広島)、備中(岡山)、大坂など様々な湊の商人たちの名前が刻まれている。

商人たちの活躍

■町政へのかかわり

酒田では、向酒田時代より三十六人衆と呼ばれた町の代表が自治を行ってきたと伝えられるが、当酒田へ移転後、幕藩体制の中に組み込まれると自治の機能は薄まった。

しかしながら、領主より徴税や租米の受払いに関して御用商・御用宿を請け負い、さらには警備や自衛を任されるなど、三十六人衆には領主権の一部が委譲されていた。

三十六人衆の一人である粕谷源次郎は、秀吉の小田原征伐の際に海上警備を任されてい

るし、関ヶ原の余波で最上勢が攻めてきた際には、町年寄の永田・上林・粕谷は町兵を率いて戦ったといわれている。さらには、町年寄の永田勘十郎は山形藩主の最上義光よしあきよりこまくちせん騎口銭（輸出税）や塩役などの徴税を任されていた。

このように、三十六人衆は町人といえども酒田の町政においては非常に重要な地位であったため、藩によって名字帯刀や飼馬を許されていた。庄内藩主の酒井氏も入部当初は、酒田町組には町奉行の直接の支配下である大庄屋を置かず、古来の形式を尊重していた。

しかしながら、正保・寛文（1644～1672）の頃になると、酒田町組にも大庄屋を設置しており、これによって古くから町政を支えてきた三十六人衆の力を弱め、武士中心の制度に変えようとしたと考えられている。町奉行は直属の支配下である大庄屋の肩を持ち、ことあるごとに町年寄や長人を押さえ込もうとしていることがわかる。

また、飼馬の権利や徴税の役目などもいつの間にか取り上げられており、役儀は形式的なものへ推移していったが、事務的なものの大半は三十六人衆へ委託され、町民の生活に密着した役目を任された。

○永田家文書（写） ※2

山形藩主の最上義光は、こまくち騎口銭（輸出税）、塩役、とど島（飛島）いか役、酒田沿岸の漁業税としての役いわしなどを、町年寄の永田勘十郎に請負徴収させている。

これらの税は、銀子によって支払われる金納となっており、町の年貢が農村よりもはやく金納化していることがわかる。町民によって徴税がなされたことは、町民の町政に対する発言力をいっそう高めた。

○酒田町年寄、大庄屋共帯刀御免願出の件につき意見書写 ※3

江戸時代 寛政11年（1799）／酒田市立光丘文庫蔵

酒田では旅人の応対も多いのに、一本だけの帯刀では軽々しく見られるため、二本の帯刀を許してほしいという内容が記載されている。この願書が提出された後に、町年寄は大庄屋と共に、二本の帯刀を認められている。

文書には「大庄屋ばかりでも」とあり、このころになると町奉行の直接の支配下である大庄屋との力関係が非常に曖昧になっていることがわかる。

■医会所・十全堂の創設

天保2年（1831）、豪商・白崎五右衛門一実は酒田町年寄の任命とともに、酒田町医修行引立掛を命じられた。その2年後に、町医の佐藤蒿庵と協力して設けた医会所が十全堂である。

「十全」とは、医師という職業が「十全」、つまりひとつの失敗も許されない厳しい職業であるということを表している。

本町六ノ丁（現・中町三丁目）の蒿庵宅に設けられた十全堂では、医術の研究と貧民の施療が行われた。一実は50両を寄付して貧しい人々の治療に充てている。しかしながら、弘化2年（1845）の大火事で建物は焼失した。

その後、米屋町の商人・竹内伊右衛門と一実の養子である白崎五右衛門一誠が、再建に尽力し、安政5年（1858）に建物が完成した。この際、一誠は荒町にある自家の所有地を、竹内は建築費として100両をそれぞれ寄付している。再建された十全堂では、種痘（天然痘の予防接種）が実施された。



▲医会所十全堂の落成式

明治16年（1883）／酒田地区医師会十全堂提供

明治10年（1877）には、医業者の研修と連携を目的とした飽海郡開業医公会が結成されたが、十全堂はその集会場所となった。集会が盛り上がりを見せるにつれて、荒町の十全堂では手狭になってきたため、明治16年（1883）、本町7丁目（現・本町三丁目）に移設された。

その後、明治19年（1886）の火災と明治27年（1894）の大震災を経て、本町7丁目（現・本町三丁目 酒田看護専門学校）の場所に再建されており、明治後期以降には、助産婦や看護婦の養成も行われた。

■飢饉への対策

庄内は、飢饉の際でも「貯え多く民飢えることなし」といわれ、庄内に行けば米にありつけるといふ噂がたったといわれている。このような噂がたった理由は、「ヤマセ」の影響を受けにくい土地であったということもそのひとつであるが、酒田においては、本間家を中心として、米や雑穀の流通に敏感な米商人や廻船問屋の活躍があったこと、穀物や粃の蓄えがなされていたこと、施粥や米の安売り座などによって困窮者の対策が取られていたことなども大きく影響している。

享保5年（1720）の飢饉では、酒田や鶴岡などで困窮者に施粥が行われており、本間家初代の久四郎原光は庄内藩に米318俵（約24t）を提供している。

宝暦5年（1755）には全国的な大凶作となったが、長人28人が酒田町組・内町組・米屋町組の三町の困窮者1300人に対する救米として3石5斗（約525kg）を持ち寄っている。

また、明和5年（1768）には本間光丘の提案によって2万俵が庄内藩に献上され、「備荒粃」として飢饉への備えとなった。この貯えは、結果として天明・天保の飢饉に貢献している。その他にも、天保4年（1833）の飢饉の際には本間家5代の光暉が、手持船を大坂・加賀・九州・肥後に走らせ、米の買い付けに奔走し、困窮者に米や粥を与えている。

酒田において、他領のような悲惨な飢饉の記録が見られないのは、このような商人たちの活躍があったからだといえる。

○正徳寺の宝篋印塔（右写真）

天保の飢饉の際に、海晏寺に施粥所を設けて、誰かれとなく施粥をしたことが刻まれている。

碑文には、一日千数百人の困窮者が施粥によって命をとりとめていること、町奉行の小川渡太夫と長人の白崎五右衛門一実が米穀の獲得に奔走し、米を安価で町民に提供したこと、医者佐藤蒿庵は病気を治すことよりも、まずは飢えて困窮している人々を救うべきだと唱えて、伊庭屋安右衛門らと穀類集めに尽力し、蒿庵の屋敷で2千人に米を支給したことなどが書いてある。

この碑は、役人や商人の恩に報いるため、酒田町人によって天保8年（1837）に建立された。



■佐藤藤左衛門・藤蔵親子の植林事業

庄内の海沿いには古来、木々が生き茂っていたと伝えられる。しかしながら、伐採や戦火のために、江戸時代の初期までにはそのほとんどがなくなり、ひとたび強風が吹くと、巻き上げられた砂で畑や家屋が埋まることもあったという。

延享2年（1745）、中町で醸造業を営んでいた豪商・佐藤藤左衛門とその子である藤蔵が、藩の認可を受けて遊佐海岸の植林事業に乗り出した。

佐藤親子の挑戦は、他に先駆けているだけに前例に学ぶことができず、ヤナギやネムノキ、ツツジなど様々な種類を植樹したが、強い風でたちまち砂の中に埋め尽くされたという。それでも続いた親子の懸命な取り組みによって、4年目にはようやく緑が育った。

ところが、宝暦元年（1751）の大火で佐藤父子の家は焼失し、借財も増え、親子はさらに苦労を重ねた。庄内藩では親子の功績を認め、土地を与えて、名字帯刀を許すなどの恩賞を与えている。

父の藤左衛門の死後、藤蔵は酒田から遊佐の藤崎に移住し、植樹に専念した。植樹した松が強風を防ぐことのできる林となったのは、藤蔵の死から約50年後のことである。ま

た、藤蔵の甥である中町角（現・イバヤ薬局）の富商・曾根原六蔵も、藤蔵にならって家を吹浦南の菅野に移し、植林を行った。

○藤崎村いしぶみ（右写真）

西遊佐上藤崎にある藤崎神社に建立された、佐藤親子の功績を讃える碑。

当初は「藤崎村碑」が宝暦2年（1752）に建立されたが、文字が読めないほど風化したため、明治36年（1903）に「藤崎村いしぶみ」が新しく建てられた。



■本間光丘の植林事業

宝暦8年（1758）には、本間光丘も植林事業に着手した。父である光寿の代から砂防林をつくる計画はあったが、光丘の代になってから本格的に始められた。

佐藤父子が遊佐地域を中心に植樹を行ったのに対して、光丘は、現在の下日枝神社の境内を基点として、南は最上川岸から北は高砂の境までの南北1.8km、東西450mの土地を預かって植林をはじめた。

はじめに、日本海から吹き抜ける風の道を探り、それが下日枝神社のあたりであることが分かると、風を遮断するために大量の砂袋を積んだ。砂袋持ってくるごとに報酬を与えたため、冬で仕事のない船船頭や丁持たちの仕事にもなった。

運ばれてきた砂袋は約6万トン、高さ18mにもなり、その巨大な砂丘に、風に強いグミやネムの木を植えた。これらが根付くと私財を投じて能登から取り寄せたクロマツの苗を植樹した。植樹した苗が砂に埋もれたり、一冬が過ぎると数千本が枯れてしまったりと、多くの困難があったが、宝暦11年（1761）にようやく一部の植え付けを終えた。植樹した苗は10万本にも及ぶといわれている。翌年には植樹等の功績を認められ、光丘は町年寄格とされた。

○^{しょうりんめい}松林銘（右写真）

松林造成の功績を讃えて、光丘が没した10年後の文化13年（1816）に、山王社（現・下日枝神社）境内に建立された。



■藩への財政協力

全国的に、富裕な商人の台頭が目立ってくると、藩の運営も商人の力なしでは立ち行かなくなってきた。庄内においても例外ではなく、元禄16年（1703）の関東地震で江戸の

庄内藩の屋敷が倒壊した際、酒田や鶴岡の商人にあわせて2万両の献金（酒田には7千両）が要求されている。

この宝永元年（1704）の上納金の要求を初見として、寛延元年（1748）までのおよそ50年間のうち、内容の明らかなものだけで17回、およそ3年に1度の割合で多額の上納金や借り上げを命じられている。上納や借り上げの理由は、藩の財政難が主であるが、他には日光廟の修復や普請（工事）などにも充てられている。

さらに、明和4年（1767）には本間光丘が「御家中勝手向取斗」に任命されているが、藩の財政窮迫の際には「安永御地盤立」「天明御地盤立」と言われる緊縮予算を立案、実行した。商人たちの経済力だけではなく、その知識も、藩を運営するにあたっては欠かせないものであった。

○藩より酒田豪商へ内々才覚金につき調達関係の覚書類 ※4

江戸時代 文政11年（1828）／鶴岡市郷土資料館蔵
藩が酒田の豪商に資金提供を依頼した際の記録。

○庄内藩御貸金方の御用箆笥

江戸時代 明和4年（1767） ※5

明和4年（1767）、藩は御貸金方を設置しており、これは本間家が中心となって家中に金貸しを行う役である。庄内藩の財政には、本間家の経済力が必要不可欠であった。



光丘は鶴岡に本間役所を設け、4千両を提供して家臣の借財整理をはじめた。当時、非常に高利であった大津の商人たちからの借金を肩代わりし、家臣には低利の年賦償還でその分を返済させている。また、光丘は藩の借財整理にも当たった。その際に使用されたのが、この御用箆笥である。

■山王祭の由来

山王祭は、日枝神社の例祭である。「日枝神社」とは、明治3年（1870）の神仏分離令以降の呼称であり、それ以前は「山王社」もしくは「山王権現社」と呼ばれていた。山王社は、上の山王社（浜田一丁目）と、下の山王社（日吉町）があり、それぞれ東禅寺分の鎮守、酒田町組の鎮守であった。

この例祭は、酒田の三つの町組の大祭として、慶長14年（1609）から陰暦4月の中の申の日に行われた。天明年間（1781～1788）ころからは、高い山車が名物となったが、これは本間光丘による観光促進事業のためであるとも考えられている。

町の繁栄とともに祭りも年々に盛大に行われ、その評判は江戸や大阪まで広まった。諸

国の廻船は祭りの時期を目指して入湊し、湊に並ぶ千石船の帆柱は林のようであったと伝えられている。

■豪商たちと山王祭

神事には酒田町組の希望者の中から、「頭人」と呼ばれる神事補佐の責任者が立てられ、大祭に関わる一切の費用を負担した。頭人の家は「頭家」もしくは「当家」と呼ばれ、その莫大な金銭的負担から、「頭家を3回もすると家が潰れる」と言われた。

このように、頭家には多大な負担がのしかかったが、頭家を勤めることは永久に名誉とされ、酒田の有力者として認められる機会でもあった。頭人は袴に刀を差し、馬に乗って行列の主人公として街中を練り歩き、行列が上内町の町奉行所前に到着すると、頭人は草履取りと花奴はなやっこを従えて奉行所に入って、町奉行から直々に酒を頂戴する式台の儀を受けた。

士農工商の封建社会にあつて、従者を従えて公式に奉行所の門をくぐる時、「数百金を投ずる苦痛もこの瞬間にあがないを得た」として後世までの語り草になるほど、頭人にとっては光栄なことであった。

○山王社祭礼当屋覚 元禄8年(1695)～明治4年(1871)／鶴岡市郷土資料館蔵

頭家(当屋)は、古くは1戸で勤めていたといわれるが、のちに4～2戸の家であたることとなった。元禄8年(1695)には、すでに複数の家で頭家を勤めている。

○山王祭行列礼 順序書 江戸時代 慶応2年(1866)／酒田市立光丘文庫蔵

山王祭の行列の順序を記録したもの。三十六人衆も行列の中心として参加している。

■商人の間で流行した「心学」

士農工商の封建社会の中で、「商」は生産活動を行わずして儲けを得る存在として低く見られてきた。当時の学問の主流であった儒学でも「金儲けは悪である」として、利益を得るということに関しては否定的であった。

江戸中期、そのような世相の中で、京都の町人であった石田梅岩いしだばいがんは、商人の営業活動を積極的に肯定する「心学」とよばれる学問を生み出した。石門心学とも呼ばれたその学問は、儒教・仏教・神道・道教等の考え方を取り入れ、儉約や正直などの徳目を通じて、「正しい商いは善である」ということを説いた。さらには、商人にとっての利益は武士の俸禄と同じ正当なものであること、士農工のそれぞれに役目があるように、商にも役目があること、四民各々が君主に仕える存在として欠けてはいけないのであるということを中心とし、商人に対する負のイメージを否定した。

梅岩が心学を説いたころ、幕府は困窮期にあり、米価や通貨のコントロールが行われ、金銭の貸し借りにおいて武家の債務が免除されるなど、商人たちにとっては非常に厳しい

時代であった。このような中で、梅岩は自宅で心学の講義をはじめ、しだいに商人たちの間に広まっていった。

■庄内と心学

庄内と心学の関わりは、9代藩主・酒井忠徳^{ただあり}が寛政年間（1789～1800）に、石田梅岩の孫弟子であった中沢道二^{ちゅうさく}を江戸の藩邸に招いて道話をきいたのが始まりと伝えられている。

文化元年（1804）には、道二の弟子である北篠玄養が、東北地方への教化活動の途中で鶴岡をはじめとして、羽黒や藤島などの郷村を廻った。

また、嘉永3年（1850）には、鶴岡の商人であった荒井和水の招待によって、江戸の心学講舎である参前舎の5代目舎主・中村徳水が来庄した。徳水は鶴岡の高運寺を振り出しにして、羽黒・酒田・松山・加茂を巡り、道話を開講している。

徳水を師と仰ぎ心学に傾倒していた和水は、安政2年（1855）に五日町（現・鶴岡市本町）に心学塾「鶴鳴舎」を創立した。奥羽19藩の中でも、講舎があったのは陸奥三戸と鶴岡の二ヶ所だけである。

鶴岡、酒田において商人の心を支えた心学であったが、明治時代に入って学制がしかれるとともに衰退した。

○荒井和水^{まさよし}昌義肖像^{あわせ}并感状 江戸時代／鶴岡市郷土資料館蔵

和水は本名を昌義といい、享和元年（1801）、鶴岡の商人の家に生まれた。

天保9年（1838）、38歳のときに江戸の心学講舎である参前舎^{さんぜんしゃ}を数回訪ねて道話を聞いており、4代目舎主・竹田道跡^{とうせき}に入門して琢磨札^{たくまふだ}（心学に熱心な者に授けられる入門証）を受けた。

○都鄙問答^{とひもくどう} 江戸時代 元文4年（1739）／酒田市立光丘文庫蔵

心学の思想を問答形式でまとめた、石田梅岩の主著。

○孝之道 江戸時代 嘉永6年（1853）／酒田市立光丘文庫蔵

心学において、実践すべき親孝行を記したもの。「出羽 酒田施印」とあり、心学普及のために酒田で配られたものではないかと考えられる。

○心学紀行 江戸時代 嘉永3年（1850）／鶴岡市郷土資料館蔵 ※6

荒井和水と中村徳水の廻村の際の紀行文。6月22日に鶴岡から船で酒田へやって、五大院（天満宮）へ宿泊。翌日には下中町の越前屋藤右衛門の家へ移り、本町の唐仁屋（森藤十郎）に招待されている。24日は本町の粕谷源吾宅へ宿泊し、29日は本町の山田（加賀屋）太右衛門に、7月1日は白崎五右衛門に招待されている。

12日間の布教の中であったが、酒田で廻船問屋を営む有力な商人たちがその教えをき

いた。中でも、山田太右衛門は後に都講（教師階級のひとつ）となるほど、熱心に学んでいた。

○心学紀行 江戸時代 安政元年（1854）／鶴岡市郷土資料館蔵
荒井和水と中村徳水が廻村した際の歌集。

○心学廻村日記

江戸時代 嘉永4年（1851）～安政3年（1856）／鶴岡市郷土資料館蔵 ※7

荒井和水が行った心学の普及活動を記録した日記。酒田や松山、余目、吹浦まで道話を講じたこと、その謝礼にもらった品々も記載されている。

教養と文化

■湊町の教養と文化

江戸時代も中期になると、全国的に商人たちの経済活動が盛んになり、それにともなって学問や芸術などの方面における影響も大きくなった。商人たちは、経済力を背景に流行を追って華美を競うばかりではなく、教養を高めて独特の文化を築いた。

酒田においても、豪商たちが富を背景として独特の文化を展開している。

■上通りと美濃派

廻船問屋を中心とした酒田の旦那衆は、教養として俳諧をたしなむ者が多く、当時の酒田の俳句界は美濃派と春秋庵系によって二分されていた。

美濃派とは、米屋町の荒物商であった武長百合坊を中心として、浜町の大地主・伊藤家や鑑屋が支援者となって上通りで流行した俳風である。

美濃派が酒田に進出しはじめたのは、天明5年（1785）、江戸の俳人である神谷玄武坊が武長百合坊をたよって酒田を訪れたことに由来する。芭蕉の流れを汲む美濃派は当初、鶴岡には進出していたものの酒田には勢力が及んでおらず、玄武坊は百合坊に宗匠（師匠）の位を与えることで、勢力の拡大を試みた。

百合坊と同時期に活躍した主な酒田の俳人には、本間家3代目の本間光丘（俳号・其山）や鑑屋家11代目当主の惣右衛門重章（俳号・文玘）などがある。特に、百合坊の門下であった文玘は早世しなければ後継者になっていたであろうといわれている。

○短冊 武長百合坊筆 江戸時代

百合坊は、本名を武長五郎兵衛といい、本家の隣の荒物商であったが、後に6代目五右

衛門を襲名し、米屋町で質屋・古着屋を営む本家を相続している。

玄武坊によって、酒田ではじめて美濃派の宗匠（師匠）の位が与えられた。

■下通りと春秋庵系

春秋庵系は、江戸から酒田に移住した俳人の常世田長翠^{とこよだちようすい}を中心として、本間家の多大な援助を受け、下通りを本拠地として流行した。

春秋庵系の宗匠であった長翠は、もともとは江戸に住んでいたが、寛政12年（1800）、享和元年（1801）と2度の酒田への滞在を経て、酒田の俳人からの強い勧誘を受けたことをきっかけに移住を決意した。翌享和2年に浄徳寺門前に胡床庵とよばれる住まいを構えた。

本間家の4代目当主・光道は、長翠に教えを受けるとともに経済的に援助しており、船場町に数奇屋造りの家屋を建てて住まわせている。また、船場町の廻船問屋であった本庄屋三郎兵衛も長翠を援助した。当時、酒田で大きな店を構えていた主人たちのほとんどが、長翠に俳諧を学んでいる。

○拾蕨帖^{しゅうげいちょう} 江戸時代 享保21年（1736）写／酒田市立光丘文庫蔵

享保14年（1729）の酒田天満宮再建をきっかけに、庄内藩士の小寺信正が、天満宮にちなんだ漢詩や和歌、俳句などを庄内中から集めて編纂したもの。約30の作品に梅が詠みこまれている。

本間其山^{きざん}や鑑屋文玘^{ぶんし}の他に、永田治右衛門（葎亀^{りつま}）や青塚佐助（些英^{しえい}）、加賀屋重助（等弓^{とうきゅう}）などの、酒田の有力な商人たちの名前も見られる。

○蓮の話 江戸時代 天明6年（1786）／酒田市立光丘文庫蔵

玄武坊の門下であった、下総佐倉の夏葉亭涼花の追善集。諸国の知友には、越後や大坂、肥前、奥州などに混じって出羽があり、玄武坊の門下であった百合坊や酒田連衆が追悼の歌を寄せている。

○梅香炉 江戸時代 寛政12年（1800）／酒田市立光丘文庫蔵

玄武坊三周忌の追善集。諸国から集められた追悼文と追悼句の中に、百合坊とその門下である文玘^{ぶんし}らの作品も収録されている。

○ねふの雪 江戸時代 元文3年（1738）／酒田市立光丘文庫蔵

江戸の俳人である腐草庵立国が、元文2年（1737）から翌年まで奥羽行脚した際の紀行記念集。行く先で一座した人々との俳諧などが収録されている。

また、永田治右衛門（葎亀^{りつま}）を願主として、出羽国一の宮である大物忌神社に奉納した

名所の句も収められている。

■華道

酒田における華道のはじまりは、正保4年（1647）に雲照寺の橘玄周が華道家・池坊専好より皆伝を受けて酒田会頭職となり、自松軒または柳雪庵と称して指導に当たったことに由来する。

池坊の酒田家元は、柿崎家、久村家を経て七代白崎五右衛門一誠・白崎五治郎・八代白崎良弥がこれを伝えている。

■商人の町と漢学

酒田に漢学が伝わったのは、元文2年（1737）ころだといわれている。それは、越後で生まれ、京都で漢学を学んだ釈道粹という人物が、大信寺六世周恵の養子となって、酒田に下ったことに由来する。もともと酒田の町は商業の町であり、読み書きそろばんが教育の中心であった。そのような町に道粹がやってきたことは、人々にとっては大変な驚きであった。

この道粹に教えを受けた上林白水は、町にはそろばんの音だけで論語を読む声が聞こえないのを嘆き、酒田において初めて本格的な漢学指導をおこなった。京都で漢学を学んだ白水は、帰郷後に学問を授ける塾を開いた。内容の乏しい文章よりも実行を重んじ、みずから今町のはずれに松林を造成したともいう。白水の門下には、植林事業で活躍した佐藤藤蔵の甥で、自らも植林を行った曾根原六蔵もいる。

酒田において漢学が最も流行したのは、宝暦～明和年間（1751～1771）といわれているが、これは白水の力によるところが大きく、白水の死後は徐々に廃れた。酒田は実学を重んじる商人の町であったため、漢学を受け入れる基盤が育っていなかったのだろう。

■酒田と学問

鶴岡では致道館を設置し、藩士教育の中核としたが、酒田においてこのような動きはなく、むしろ学問よりも実学教育が重んじられた。子弟に対しては読み書きそろばんが教えられ、あとは商人の子には商売往来（商売の教科書）といった具合に教育が施された。酒田の学芸の基礎は上方にあり、往来物（教科書）は北前船によって運ばれてきたものも多い。

幕末になると、富商の子弟のうち優秀なものは、米沢藩校・興讓館の友干堂に入っており、白崎五右衛門一実、本間新四郎国光、国光の弟・本間郡兵衛らがそこで学んでいる。致道館は身分制度が厳しく、町人は入ることができなかったが、興讓館は上杉鷹山の師で

あり、設立にも関わった儒学者・^{ほそいへいしゅう}細井平州の学風もあって比較的自由であった。

○商売往来 江戸時代 元禄8年(1695) / 酒田市立光丘文庫蔵
商取引に必要な知識を学ぶための往来物。あわせて商人生活をおくる上での心得なども説いた。

○商売往来 江戸時代 文久4年(1864) / 酒田市立光丘文庫蔵
「羽陽酒田門人中」とあり、酒田で発行されたものであることがわかる。このような往来物が発行されたのは、土地柄、商売往来の需要が高かったためであろう。

○^{てがみあんもん}手紙案文 江戸時代 文化8年(1811) / 酒田市立光丘文庫蔵
京都で発刊された手紙の書き方の往来物。四季に合わせた手紙の書き方や、商用の手紙、慶事の手紙などの書き方が収録されている。

○^{おんなていきんごしよぶんこ}女庭訓御所文庫 江戸時代 天保8年(1837) / 酒田市立光丘文庫蔵
教養や言葉遣い、心得を説いた女性のための往来物。挿絵も豊富なため、何度も再版されている。

○^{じんこうき}塵劫記 江戸時代 天明3年(1783) / 酒田市立光丘文庫蔵
最も普及した算書といわれており、そろばんの図つきで計算方法を解説している。

■酒田の服飾文化と^{かっぎ}被衣

酒田は古くから海船によって京都や江戸から古手と称して衣類を大量に仕入れたため、衣生活が豊かであった。なかでも、京都からもたらされた「被衣(女性の外出時のかぶり物)」は非常に需要が多く、のちに酒田でもつくられるようになったという。酒田でつくられた被衣は、「庄内被衣」とよばれた。

出羽における女性の髪型や服装の流行は酒田が発祥地で、北は本荘のあたりから南は山形のあたりまで、酒田風ともてはやされたとも言われている。

○^{しょうじょうえ}猩々会記 ※8

江戸時代 寛保元年(1741)～文化3年(1806)
本町四丁目には町年寄の上林家をはじめ、唐仁屋



▲被衣

(森)などの豪商が軒を連ねていたが、町内の親睦をはかるために寛保元年(1741)、「猩々会」をつくり、毎年春秋の2回、会食を開いた。

■本間光丘と寺社

本間家三代目当主・光丘は観光促進のために祭りを華やかにしたが、寺や神社を荘厳にすることによっても、よそから観光客を呼ぶことができると考えていた。

現在酒田に残っている古い建物は、光丘の指導・企画によるところが大きく、その中でも下日枝神社や、本間家の菩提寺・浄福寺の唐門などは、度重なる大火や地震にも倒れず、現在まで受け継がれている。

○浄福寺唐門(写真)

京都や近江から大工を招き、莫大な出費をして作られたといわれる。寛政11年(1799)建立、寛政12年(1800)に光丘によって寄進された。

見た目はもちろん、耐震構造にも重きが置かれ、施工者の知識・技術の高さがうかがえる。この唐門は明治27年(1894)の大地震の際にも倒壊しなかった。酒田市指定文化財。

○下日枝神社 拝殿(写真)

現在の社殿は、天明年間(1781~1788)に建立された。明治27年(1894)の大地震の際に拝殿は^{ひかし}庇が倒壊、隨身門は全壊したが、本間家によって修復がなされた。

その際に瓦が足りず、酒井氏より旧鶴ヶ岡城の瓦を頂戴しており、そのため、拝殿と隨身門には社紋の三つ巴、本間家の丸本、酒井家の剣かたばみの三つの瓦が入り混じっている。

ガラスケース

○御客船帳 江戸時代／あいおい工藤美術館蔵

江戸から明治期にわたる北前船の入湊記録。入湊日、船名、船印、船頭名などが記録されており、大坂をはじめとして、全国各地のほとんどの湊から船がやってきていることがわかる。北前船の入湊は毎年4月下旬~6月上旬にピークを迎えているが、これは、山王祭で酒田がよりいっそう賑う時期にあわせてやってきたためであるとも考えられている。

酒田は全国有数の湊町であったが、度重なる大火のためか、このような資料はこれまで発見されなかった。この資料はつい最近、旧家の蔵より発見されたものであるが、酒田はもちろん、全国の海運史から見ても非常に貴重な一冊といえる。

○さかたごひいきいまま^{おなご}ち女子しゅ 江戸時代 享和3年(1803) ※9

酒田の遊女の姿を描き、一人ひとりに百人一首になぞらえた歌が添えられた評判形式の遊里案内書。作者は不明であるが、京都や大坂、吉原などで出版された案内書を模倣したものであるとも考えられている。

酒田の遊里に関する資料は、度重なる大火のためか非常に数少なく、中でもこの時代のもので、なおかつこのように絵が添えられたものは大変珍しい。



▲さかたごひいきいままち女子しゅ

○酒田三十六人衆勤^{つとめがた}方規約書

江戸時代／鶴岡市郷土資料館蔵 ※10

三十六人衆が実際に業務を行う際の慣例や規則をまとめたもの。三十六人衆の役割は、殿様の送迎や役人の案内、伝馬や人足の管理、町内の夜回りや火消しなど、領主に対する儀礼的なものや町人生活に密着したものが中心となった。